大石寺という名前が意味するもの

廣田　頼道

昔から、名は体を表わすと言います。では「大石寺」という名前は、どういう体（中味）を表わしているのでしょうか。

身延が謗法と化して日興上人は、日目上人はじめ諸弟子と共に身延の山を降りて、上野の南条時光氏の純粋な信仰をたよりにして、現在の大石寺の場所に寺を開くことになります。

一般に大石寺という名前は、潤井川の川原全体に富士山からの大きな石がゴロゴロと散乱していて、田畑も作ることが叶わない様な荒地で、大石ケ原と呼ばれていた所を、南条家が供養され、その開墾によって、大石寺が開かれたと言われているのであります。

ですから、

大石ケ原の寺（大石ケ原にある寺）
←
大石の寺
←
大石寺

つまり、土地の景観を示す形容詞がそのまま寺の名前になった様に言われ、一般の人もその様に理解しているのであります。

事実、文献資料にも

日有上人聞書「御物語聴聞抄」（歴全一ノ三一七P）

大石カ原ト申ハ上代地頭奥津方（南条後の地頭）ヨリ永代ヲ限リ十八貫ニ買得ニテ候

と示され、日有上人の時代においても語りつがれて、この土地が大石カ原と呼ばれる土地であり、その上に建立された堂坊を大石の寺と言っていたことが容易に想像出来るのであります。

「大石寺」という明確な名前が真筆初見となるのは、日目上人の大石寺坊主の事（旧名白布御返事）「日目」（二二九P）

大石寺には人なく候

の御文であり、この御文は年度未詳でありますが、内容から推察して、日興上人が重須に移られた後、日目上人が大石寺をまかされてよりの永仁六年（一二九八）以後の書であることは、まちがいのないものと思います。

又、真筆はないけれども、日興上人の言葉としては、

日興跡条々事（要集八―一七）

大石寺者云御堂

とあり、正慶元年（一三三二）十一月十日として明記される。

いずれにしても「大石寺」と呼ばれていたことに誰も何の異論をはさむ余地はなく、歴史上の事実が現実にあったことになります。

この「大石寺」が、広宣流布の暁には、「本門寺」という名前に換えなければいけないという考え方が、富士門の上代から言われています。

この主張の中心は

身延相承書（全集一六〇〇頁）

国主此の法を立てらるれば富士山に本門寺の戒壇を建立せらるべきなり。

百六箇抄（全集八六七頁）

三箇の秘法建立の勝地は富士山本門寺本堂なり

富士一跡門徒存知事（全集一六〇七頁）

最も此の砌に於て本門寺を建立すべき由

この本門寺構想は、文献の内容からすれば、本門戒壇の大御本尊を天下に公開して示すのだから、本門戒壇の寺という意味で本門寺。又は、爾前迹門の寺に比べて、こここそ本門寺という意味、の二つがあると思うが、より重点を置くのは、前者の本門戒壇建立の寺としての本門寺という意味内容と思われる。

創価学会は、正本堂建立の時点でも、立教開宗七百五十年の時点でも（大石寺と樒月関係であった時）、本門寺改称に随分、執念を持ち、大石寺を動かそうとしたようだった。

彼等がいう全世界の人々が入信する広宣流布がされようがされまいが、池田大作の偉業完成の目に見えるピリオドを打って、一巻のドラマに仕立てようと思ったのであろう。しかし現実には正本堂がこわされ、大石寺坊主の一抹の良心か、大石寺から本門寺への改称は現実のものとはならなかった。

しかし、実際問題として「本門寺」という名前に改称することが、現代の大石寺の状況において何の意味があるのだろうか。

私は未来においても何の意味も無いのではないかと思う。もし無理矢理に改称することがあっても森羅万象に、一切衆生成仏に影響は皆無であり、真実の仏法の宣揚になることは微塵もないと思うのであります。

たしかに、「身延相承書」「百六ケ抄」「富士一跡門徒存知事」等の記述はあります。しかし、そうであるならば末寺格に当る所の讃岐本門寺、西山本門寺、北山本門寺等は、何故何のためらいもなく、本門寺と名乗っているのでしょう。

讃岐本門寺は、第七代の日迎の代、文明元年（一四六九）十一月二十八日に管領細川勝元「讃岐本門寺制条」「同添状」が発給され、宛名の「本門寺大坊」が本門寺公称の初見と思われます。

西山本門寺は、蔵人阿闍梨日代が、康永二年（一三四三）頃に西山に法華堂を創建したといわれます。その時に本門寺と名乗っていなくても、康応二年（一三九〇）六月七日、自筆の書写本尊を弟子の日

任へ授与して本門寺の後任と定め、四年後の応永元年四月十八日に九十八才で亡くなったとされるのであります。

本門寺という名称に深重な思いがあるならば、本門寺と名乗ることは絶対のタブーであります。

まして、北山本門寺に至っては、日興上人自身が、永仁六年（一二九八）二月十五日の「本門寺棟札」において、

法華本門寺根源

と、日興上人の書体とは異なる疑いを持たれるものの、このように示されている。

大石寺が、本門戒壇本尊建立の本門寺たるべき寺であると「富士一跡門徒存知事」の中で述べ乍、重須本門寺（北山本門寺）と名乗ることは、大石寺が未来に本門寺と名乗るべき寺であることを否定する自己矛盾の極と言わざるを得ない。こんな馬鹿馬鹿しいことは、一人の人間の行為として出来るはずがないのであります。

本門寺の名称とは違いますが、日興上人、日目上人が離山して来た身延は、弘安八年五月四日（一二八五）、波木井日円消息「与白蓮阿御房書」において

「さてハくをんし（久遠寺）にほくゑきやう（法華経）のひろまらせをハしまして候よし」

と示され、日興上人在山の折から久遠寺と称していたことが分ります。日興上人在山の折から言えば、久遠実成の久遠ではなく、久遠元初の久遠の寺という意味になります。

ならば、大石寺を敢て本門寺と未来において名乗る意味と価値がどこにあるのでしょうか。

末寺が本門寺と名乗っているのに、総本山が未来に向って本門寺と名乗ることを夢見て、末寺の後塵を拝する必要があるでしょうか。それならばいっそのこと

文底秘沈寺

久遠元初寺

一念三千寺

四国に実際にある日満上人命名の

本因妙寺

等の寺名の方が、よほど日蓮大聖人の本懐を表示しているのではないかと思うのであります。

そんな名前は、寺名としては字余りでおかしいと

考える人もいるかも知れませんが、大石寺山号の「多宝富士大日蓮華山」自体が、破天荒な字余りなのですから、何の問題もないと思います。

末寺が本門寺と名乗り、身延が久遠寺と名乗る。大石寺開山より七百余年の歴史の中で、今迄に、大石寺が改名する理由やきっかけは、何度でも、いくつでもあったと思うのであります。しかしそのことをしなかったのには、もっと深い理由があったのではないかと私は思うのであります。

仏教をある程度学んだ者であるならば、仏教の中で「大石」という形容が何を指すものであるかということは、容易に分ると思います。

祈祷抄（全一三四九P）

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等量の位までせめて元品の無明計りもちて侍るが、釈迦如来に値い奉る元品の大石をわらんと思ふに、

千日尼御前御返事（全一三一六P）

譬えば女人の一生の間の御罪は諸の乾草の如し法華経の妙の一字は小火の如し、小火を衆草につきぬれば衆草焼け亡ぶるのみならず大木大石皆焼け失せぬ、妙の一字の智火以て此くの如し諸罪消ゆるのみならず衆罪かへりて功徳となる毒薬変じて甘露となる是なりと、御金言にも示されています。

大石とは、元品の無明のことを表現している言葉なのであります。

元品の無明とは「仏教語大辞典」（一九九P）

「諸煩悩の元始としての無明、最も微細な根本としての無明、根源的な無明の意。①『起信論』では、無明を根本無明と枝末無明（衆生が一法界の理に達せず、忽然として妄念の起動するのを根本無明と名づけ、この根本無明より起る業相、見相、境界相の三細を枝末無明と名づける。見思の惑を枝末無明という）とに分けるうち、根本無明を元品の無明といい、忽然念起の無明とも名づける。②天台宗では等覚の菩薩の最後心で、妙覚智によってのみ断ぜられる最後の無明、最後品の無明という。

「織田辞典」（三六八P）

根本無明とも無始無明とも云ふ、中道実相の理に迷うものを無明と名ける。元品無明が無始生死の根本なり。之を断し了りて一念は成仏の位なり。「七帖見聞二末」に一切衆生皆本覚の如来にして、法性

真如の體なり。然に一念の無明が起り始めて、法性の月を隠して迷の凡夫となるなり。法性は月の如く無明は雲の如し。元品の無明とは、本覚真如の内証を迷い始めし一念の無明なり。故に元品と云ひ、又無始の無明と云ふ。

この様に解説されているが、要約すれば、元品の無明とは、凡夫が煩悩を断じようと心掛けても、最後の最後迄断じ切ることの出来ない根源的な無明（迷）であり、これを断じなければ妙覚（成仏）を得ることは出来ないものであります。

世の中には、ある日雷に打たれたように悟を得て、仏になった神になったと、言った者勝ちで、生き仏、生き神を名乗る大嘘言者がいますが、煩悩というのは、

。洗っても洗っても出てくる垢
。剃っても剃ってもはえてくる毛
。食べても食べても減る腹
。悟っても起る迷い

であり、一度悟ったら床の間の置き物のように、じっと定っているものではないのであります。

だからこそ、日蓮大聖人は、前記「祈祷抄」「千日尼御前御返事」に示される様に、一念三千の妙法受持のみが、元品の無明（大石）を砕くことが出来ると示されているのであります。

刃物も何も通用しない大きくて固くかたまって微動だにしない大石を、元品の無明のいかんともしがたい存在に重ねて、元品の大石と、仏教に関わる古の人々は称したのであります。

しかし日蓮大聖人の法門からこのことを見れば、「元品の無明」があるということは、その対極には「元品の法性」があるということになります。

このことを

「治病抄」（全九九七P）

法華宗の心は一念三千・性悪性善・妙覚の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等と顕われ元品の無明は第六天の魔王と顕われたり

と示され、元品の無明の断ち難い地獄、餓飢、畜生、修羅があるならば、この生命を具えたまま、元品の法性、仏界も又具する所の十界互具、一念三千の法受持によって九界の迷い貪瞋癡の三毒を持ったまま、

「妙一女御返事」（全一二六一P）

法華経の即身成仏に二種あり迹門理具の即身成仏

本門は事の即身成仏なり、今本門の即身成仏は当位即妙本有不改と断ずるなれば、肉身其のまま本有無作の三身如来と云える是なりの成仏が得られるのであります。

もちろん大石が原にある寺ということから、自然に大石寺と呼ばれるようになったことは否めない事実だと思いますが、大石寺と名乗ることは、仏教者から見れば「元品の無明寺」と名乗るような、これほど恥かしい名前はないということになります。まずいと思えばいくらでも法門的寺名を名乗るはずであります。しかし、日蓮大聖人の法門の上から「大石寺」を名乗ることは、元品の無明を持った衆生が成仏出来る正法は、ここにしかないということを標榜している名前だということが言えるのであります。大石寺の各本山、末寺が法門的寺院名を名乗って行く中で、大石寺が大石寺を名乗ったことは、現代の大石寺の人間が忘却していても、そういう理由がそこにあるからこそのものなのであります。

今さら未来に向けて「本門寺」と名乗っても、森羅万象に与える影響も覚醒も皆無であり、意味はありません。そんなことよりも、近年の大石寺に「大石寺」と名乗っている中味がないということが一番の問題だと思います。

貫主が現代の大聖人であり、生き仏と勘違いしている権威主義。十界互具一念三千の差別無用の法門を説き乍、階級差別観を持ち。一切衆生悉有仏性を説き乍、貫主が成仏の記別を与えるかの感覚。戒壇本尊が安置管理されている所こそが正しいという、衆生の法性から離れた形への信仰。

元品の無明寺＝大石寺

元品の無明を持つ一切衆生の成仏は、日蓮大聖人の正法しかないという大石寺本来の姿は消失し、今大石寺は、本当に頑迷な元品の無明のカチカチの大石に閉じこもった元品の無明寺となり、元品の無明学会と地獄、餓飢、畜生、修羅の戦いに狂奔している、働きがなく不毛、物が育たず、価値がない世間一般の身を持て余す大石を表示しているだけの存在なのであります。